

可能であることを考えれば、本書のような形で再出版されたことはありがたいこととせねばならないだろう。本書に載録された文の著者名、題名、初版年代を示すと次の通りである。(1) Phya Anuman Rajadhon, 「タイ語における語変形・音節拡張」* 1952; (2) 辞典編纂委員会書記, 「何故 “Chpho” と綴るか」1951; (3) Charoen Intharakaset 「辞典編纂委員会の事業」1953; (4) 内閣総理府および王立研究所告示「タイ語のローマ字表記」1939; (5) 内閣総理府告示「外国語単語のタイ文字表記」1942; (6) 内閣総理府および王立研究所告示「大陸名、国名、主都市名、大洋名、海名および島名のタイ文字表記に関する規定」1963; (7) Cham Thongkhamwan 「ラームカムヘーン王時代におけるタイ文字とコーム文字との比較」。これらの中で純粋に「論文」の性格を帯びるのは(1)および(7)である。(3)は辞典編纂の際の討議録から興味あるものを集めたもので、内容的には(2)もこの中に含まれるものとみてよい。(4), (5)はローマ字のタイ文字表記およびタイ文字のローマ字表記に関する規定であり, Haas 式の音素表記になれた者にとってはなじみがたいところがあるが, いずれもかなりよく知られたものである。(6)はタイ語で物を書く際に参照するのに便利である。

(1)はクメール語から来た infix を持つタイ語の単語に関するもので, 本書を通じて最も興味深く読ませるものである。この infix と言うのは /kraɲ/ : /kamraɲ <k-am-raɲ/ における /-am-/ の類で, 現代タイ語には極めて多く存在するものであるが, これを音韻にもとづいて全部で九つのグループに分類し, 多数の例を集めたものである。ただ本論は何らかの結論を提出する論文というよりは, むしろ資料を整理整頓して研究の資料として供するものと言った方がよいだろう。歴史的あるいは比較的研究の際の便利な資料となるのではなかろうか。(7)はラームカムヘーン王碑文のタイ文字は当時の略式コーム文字 (akson khom charūk に対する akson khom wat) およびそれ以前より他のタイ族 (ルー, プータイ等) によって使用されていたモン系文字とに由来するものだとの考えにもとづき各文字を比較している。

以上のように, 本書の内容は真新しいと言うものではないが, なかなか興味深いものばかりであり,

また本筋とは直接関係のないような部分にも, 色々と研究のきっかけになるような点を多く含んでいる。

* 以下題名は筆者の私訳

(桂満希郎)

Tatuo Kira and Keiji Iwata, eds. *Nature and Life in Southeast Asia*, V. Kyoto: Fauna and Flora Research Society, 1957. vii+312+20p.

大阪市立大学を中心とする東南アジアの研究報告書である。吉良竜夫・岩田慶治両氏の編集記にもあるように, マラヤ・タイを中心として, カンボジア・北ボルネオを含んだ資料の研究報告であり, とくに, 古生物・昆虫・霊長類・人類を中心にして, 新三カ年計画がはじめられるという。京都大学と, 大阪市立大学といずれも関西の大学が, 期せずして同じ地域の調査をはじめていることは, 日本の海外調査の中核の一つを形成し, たがいに良い意味での競争者として, たいへん有意義である。ひとつのモデル・ケースともなるであろう。今後とも, 同大学の研究の発展を願ってやまない。内容は次のとおりである。

TJBE 1961-62の淡水藻類——平野実

北部タイの山村における栽培植物

エノコログサ属——ウィルウェーバー・岸本

トウモロコシ属——町田暢

タイの森林の3型の生態的研究

群落の呼吸——依田恭二

主としてカオ・チャン降雨林における乾燥重量

物の生産について——吉良竜夫・小川房人・

依田恭二・荻野和彦

東シナ海周辺の淡水プラナリア——市川純彦・川

勝正治

タイのササラダニⅡ——青木淳一

カンボジアのトンボ目について——朝比奈正二郎

タイおよび北ボルネオのアメンボ科——宮本正一

タイにおける害虫の天敵の基礎研究

前社会性膜翅類の生態——岩田久二雄

北タイの Thai Yai, Thai Lu その他の山地民

族の農耕について——岩田慶治・松岡通夫

(吉井良三)